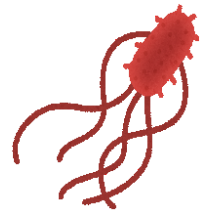


# 薬局だより

白庭病院  
2017年11月

今年の夏はO157による感染が世間を騒がせていました。  
O157に感染すると重症化することもあるため、O157の感染や治療薬、  
注意する薬や予防のお話しをします。



## <O157とは？>

病原性大腸菌には4種類あり、その中の腸管出血性大腸菌（ベロ毒素産生性大腸菌）はベロ毒素というものを出して、溶血性尿毒症症候群（HUS）や脳症（けいれんや意識障害）を起こします。O157は、この腸管出血性大腸菌の代表的な細菌です。

## <感染について>

O157は家畜などの糞便中にとときどき見られ、糞便や糞便で汚染された水、食物を介して、人の口に入りO157感染症を起こします。

O157の感染力は非常に強く、100個程度のO157が身体の中に入っただけでも、病気を起こしてしまいます（多くの食中毒では、100万個以上の菌が身体の中に入らないと食中毒は起こりません）。

食中毒は、ふつう気温が高くなる初夏から初秋にかけて発生しやすくなりますが、O157は感染力が強いため気温の低い時期にも感染することがあります。

## <O157の生存条件・増殖条件>

- 水の中、土の中で数週間～数ヵ月間生きています。
- 低温に強く、冷凍庫内でも生きています。
- 酸性に強く、口から入ったO157の大部分は胃の酸にも負けずに生き残ります。
- 熱には弱く、75℃1分間の加熱で死んでしまいます。
- 増殖は、温かく栄養分と水分のあるところで盛んになります。清潔、乾燥、低温を保つことで増殖を抑えることができます。身体の中では大腸で増殖します。

## <O157の症状>

激しい腹痛を伴った水様便が頻回に起こり、血便になることもあります。

★成人では感染しても、無症状だったり、軽い下痢で終わることが少なくありません。しかし、その場合でも便には菌が混じって排泄されていますので、家族に感染を広げないよう十分な注意が必要です。

O157で特に問題となるのはベロ毒素による溶血性尿毒症症候群（HUS）の合併です。ベロ毒素が赤血球や腎臓の細胞を破壊するために起こる疾患で、溶血性貧血や腎機能障害、

血小板減少などを引き起こします。

症状は下痢や腹痛、発熱など腸炎の症状が現れてから 4～10 日目頃に尿量の減少、浮腫、皮膚の出血斑などの症状を認めます。中枢神経に影響が及んだ場合は頭痛、意識障害、痙攣がみられ、急性脳症を伴う場合もあります。

## O157 の治療薬



### 【抗菌薬】

主にホスホマイシン（ホスミシン）、ニューキノロン系薬剤（クラビットなど）を使用されることが多いです。

※抗菌剤が菌を破壊することによって菌からのペロ毒素放出が増加し、症状を悪化させる懸念があります。そのため、医師が慎重に判断して抗菌薬を使用するか検討されます。

### 【整腸剤】

抗菌薬の使用に関わらず、乳酸菌製剤（ビオフェルミンなど）や酪酸菌製剤（ビオスリーなど）が有効であると報告があります。

## 注意する治療薬

### 【下痢止め】

下痢止めの使用は控える方が良いです！！

下痢止めによる腸管運動を抑える効果が、ペロ毒素を体外へ排出させにくくして HUS の合併を高める結果になることがあります。

腸炎の治療は自分の判断で薬を服用せずに医師の診察を受けましょう。

## 予防が一番大事

### 【手洗い】

人から人への感染を防ぐには、手洗いをまめにすることが大切です。排便後、食事の前、とくに下痢をしている子どもや高齢者のお世話をしたときには、石けんと流水でよく手を洗います。



### 【食品の保管】

肉、魚、野菜などの生鮮食品は新鮮なものを使用し、賞味期限前に食べましょう。冷蔵庫は 10℃以下（細菌の増殖がゆっくりになる）、冷凍庫は -15℃以下（細菌の増殖が止まる）に保ち、早めに食品を使い切るようにします。

